

不老不死と人間の幸福

久保田進一

はじめに

多くの人間が望むこととは何であろうか。おそらく、幸福になることである。では、幸福になるとは、どういうことであるのか。人間の昔からの願望としては、長生きをしたいということが挙げられるだろう。これは、現代人においても多くの人が望むところである。人類に共通した願望と言えるだろう。

さて、現在のバイオテクノロジーの発展には目覚ましいものがある。いまや、老化のシステムが解明されつつある。不老不死は長年の人類の願望であったが、果たして、それが人間に幸福をもたらすのであろうか、それとも不幸をもたらすことになるのであろうか。この点について、考察をしていきたいと思う。

現代においては、バイオテクノロジーによって、不老不死の可能性に現実味が出てきている。もちろん、現実にはその実例があるわけではないが、理論的にはその可能性が見出されてきている。それは、人類史上始めて以来のことである。そこで、まず、人類の憧れとしての不老不死がどのように捉えられてきたのかを見てみよう。そして、現代における不老不死が実現されるかもしれない技術を取り上げる。次に、最近の話題として ES 細胞と iPS 細胞による永遠の生命について触れておく。そして、現代の拡大していくバイオテクノロジー、特にクローニングや ES 細胞研究に反対しているレオン・R・カスの議論を取り上げて、批判検討をしてみようと思う。これによって、不老不死と人間の幸福について考察していく。最終的には、人間の幸福をどう考えるべきかを示そうと思う。

1. 不老不死への憧れ

不老不死は人間の昔からの願望である。その起源を正確に辿ることは難しい。しかし、逆に考えれば、不老不死を望むと言うことは、死を望まないことであり、おそら

く人間が死を意識したときからと考えられるだろう。例えば、ネアンデルタール人の遺体の側には花が添えられて埋葬されていたということから、われわれが死者に花を手向けるということと同じような精神構造をしていただろうと考えられている。そうすると、ネアンデルタール人も死後の世界について考えていたのではないだろうか、と思われる。とにかく、死後の世界（来世）について、人類が考えていたのはかなり昔からであるように思われる。

死や死後の世界（来世）についての説明を果たしていたのが宗教であった。多くの宗教は、死の恐怖から人間を解放してきたとも言える。肉体は滅んでも、魂は不死であるとか輪廻によって生まれ変わるとか死んだら天国や極楽へ行けるという説明で死からの恐怖を救ってきたとも言える。これらのことは、キリスト教やイスラム教や仏教の思想にも見られる。魂の不死と関連して言えば、おそらく、ほとんどの宗教の考え方として死後の世界を想定している。それゆえ、宗教は死の恐怖から人々を救うという役割を果たしている。このことから、魂が肉体から解放されて、死後の世界に行くというのは、魂だけではあるが、ある意味、不死の思想を表している。

これまで宗教によって強調されてきたことは、魂の不死であり、肉体の不死ではなかった。肉体の不死は避けることができないし、肉体は死後、急速に腐乱していくからである。たとえ、ミイラとして肉体の保存に努めたとしても、死んだ肉体は再び生き返ることはない。もちろん、生き返ると信じることは、各人の自由である。しかし、現実には、一度死んだ肉体は生き返ることはない。したがって、肉体に不死を求めたとしても、どうにもならないのである。しかし、魂の不死ということになれば、何らかの物語を作ることは可能である。それぞれの宗教は、肉体の死後の物語を作ってきたとも言える。したがって、何らかの信仰を持っている人は死後の世界も魂の存在も魂の不死をも認めるのかもしれない。しかし、そうでない人にとっては、魂の不死はなかなか認めることはできないだろう。むしろ、肉体の不死が可能であるなら、魂の不死よりも肉体の不死を求めるだろう。ただ、これまで老化のメカニズムがわからなかったので、肉体の不死を求めることは諦めていたが、今後、老化のメカニズムがわかってきて、老化を防ぐ技術が開発されたり、若返りが可能になるようになったら、肉体についての不老不死を求める人たちも出てくるだろう。技術的に肉体の不老不死が実現できるなら、それは人類が長い間憧れていたことのひとつが実現されることになるだろう。

2. 不老不死を実現するかもしれない技術

それでは、不老不死の研究としてどのようなものが考えられているのか見てみよう。

まず、カロリー制限が挙げられる。食餌摂取量を大幅に減らすと、動物の寿命に劇的な効果が与えることができる。1930年代の半ばには知られていたことであった。さらには、マウスとラットの研究では、寿命ばかりではなく、「若さ」も維持することができたという報告もある。しかし、カロリー制限による老化防止効果の生物学的基礎は今でもよくわかっていないのである。けれども、カロリー制限と寿命の関係には相関関係があると考えられている。アメリカのバイオ系のベンチャー企業ではカロリー制限模倣剤なるものが開発中ということである⁽¹⁾。

また、遺伝子操作による研究もある。この研究は、寿命と老化の速度に重大な影響を与える遺伝子を突き止めることにある。近年、線虫、ショウジョウバエ、酵母菌で老化の速度に関わる生化学的な経路が、いくつか特定されたが、人間についてはまだ特定されていない。しかし、最終的には人間においても生を延ばす単一遺伝子が発見されるのではないかと言われている。人間についての研究で注目されているのが、早期に老化を引き起こす極めて稀な遺伝病である早老症の研究である。この研究によって、早老症の遺伝子診断と治療法の開発ばかりではなく、通常の老化過程にも新しい洞察が与えられるかもしれないと期待されている。

1980年代中頃から、染色体の末端にあるテロメアが細胞分裂のたびに短くなり、最終的にこの短縮が細胞分裂を止め、細胞の死を引き起こすことが分かってきている。1990年代の研究によって、テロメアの長さは細胞の老化と相関関係にあり、テロメアの短縮を妨げることができれば、細胞の老化を遅くすることができ、条件さえ整えば、細胞増殖の暴走やガンの危険性を増やすことなくテロメアの短縮を妨げる可能性があることが示されている。しかし、細胞の老化と有機体の全体的な老化との結びつきは全く不明である。

また、ヒト成長ホルモンの使用がある。人間の寿命を延ばすことができるのかどうかは分からないが、老化を防ぐ目的で毎日ヒト成長ホルモンを注射し、肉体の健康状態や機能面で目覚ましい改善を遂げていると言う。

また、将来どんな科学技術が発展しているかわからないが、おそらく不老不死の技術が発展していることを期待して、それまで遺体をマイナス 200 度の液体窒素の中に

入れて保存するという人たちもいると言う。このような人たちの行為は、死に対する恐怖の裏返しであるとも言える。このような人間の心情を鎌田氏は次のように言い当てている。

「すべての人間は「死」という未知なる現象に対する不安や恐怖を抱えている。その不安や恐怖が強ければ強いほど、その逆に、「不老長寿」や「不老長生」や「不老不死」という「永遠の生命」に対する憧れと希求を抱く。であれば、死への不安や恐怖がある限り、「永遠の生命」に対する探究は止むことはなく、それゆえ真の安心がもたらされることはない」⁽²⁾と。

その後、鎌田氏は「不老不死」について次のように言う。

「「不老長寿」や「不老長生」や「不老不死」を求めるよりも、むしろ死を見つめ、死ぬ覚悟を深くすることが問題解決の本質に近づく道であると私は思っている。つまり、「生老病死」の自覚あるいは諦念である」⁽³⁾と。

確かに、ここまで自覚できれば、死に対する恐怖はないだろう。「「生老病死」の自覚あるいは諦念である」というのは、仏教で言う悟りの境地である。普通の人はなかなかこのように思えないから、悩むのであるし、死は恐怖に思えるし、できるなら「不老不死」を望んでしまうのである。「不老不死」が可能であるのなら、その技術の恩恵にあやかりたいと思うのが多くの人の考えだろう。

3. ES 細胞と iPS 細胞による永遠の生命

ここまで不老不死ということに関して、一人の人間、一つの個体（有機体）に関して議論してきた。つまり、一人の人間がこの世に生まれて、その人間の肉体が不老不死であり続けることを問題にしてきたし、それは永遠の生命を意味していた。ところで、ES 細胞や iPS 細胞の出現は、上記で述べてきたこととは異なる仕方であるが、ある意味、永遠の生命を実現するようなことが起こりそうなのである。このことについても触れておきたいと思う。

ES 細胞は胚幹性細胞とも呼ばれ、理論上すべての細胞に分化する性質を持っており、それ自体を無制限に再生できるのである。そのため、再生医療への応用に期待されている。しかし、ES 細胞はそもそも余剰胚（受精卵）から採取するため、「生命の萌芽」

を壊してしまうと言われ、倫理的に問題があると議論されている。この倫理的問題をクリアできるとされているのが、iPS 細胞である。iPS 細胞は、人工多能性幹細胞とも呼ばれ、2007 年 11 月に京都大学の山中伸弥教授らによって、その作成が成功された。ES 細胞と iPS 細胞の違いは、ES 細胞は余剰胚から作られるのに対し、iPS 細胞は体細胞から作られるということにある。これによって、「生命の萌芽」とされる胚を壊す必要はなくなるのである。ちなみに、ES 細胞研究に反対していたブッシュ大統領やローマ法王庁も iPS 細胞については歓迎している。また、医学的にも違いがある。ES 細胞から組織が作られて患者に移植された場合、拒絶反応が起きるので、患者は一生免疫抑制剤を必要とする。一方、iPS 細胞からの移植では、患者本人の体細胞から作られるので、拒絶反応のない組織を移植できると期待されている。

永遠の生命ということに関して、ES 細胞と iPS 細胞がどのように関係してくるかと言えば、これらの細胞から配偶子（生殖細胞）が作られ、試験管内で受精させ、再度そこから ES 細胞を作成していくとなると、無限に繰り返される命、つまり永遠の生命が作られることになる⁽⁴⁾。実際、当初は、文部科学省は当初はヒト iPS 細胞から精子や卵子などの配偶子を作ることを禁止していたが、2008 年 10 月 17 日の専門医委員会で基本的に認める方針で合意した⁽⁵⁾、としている。というのも、この背景には、現在、世界的にはヒト ES 細胞等から配偶子を作成する研究が進行しているからである。もちろん、作られた配偶子を受精させることにまでは認めていない。

さて、この場合の永遠の生命というのは、個人が永遠に生きるのではなく、ある遺伝情報を持った細胞（個体）が永遠に生きるということである。これは、われわれが望んでいる永遠の生命ではないだろう。いくら、遺伝情報が永遠に生き続けても、この「私」は存在しなくなるからであり、同じ遺伝情報を持った別の肉体があっても、そこにはこれまで同じ意識を持ち続ける精神がないのである。したがって、私の体細胞から iPS 細胞がつくられ、そこから配偶子が作られ、クローンができて、無限に作られることになって、永遠の生命と言っても、この「私」自身には無関係であり、むしろ気持ち悪さを感じる。少なくとも、私には幸福であることは感じられない。

4. 不老不死は人間を幸福にするのか——カスの主張

そもそも、不老不死によって人間は幸福になれるのだろうか。現代においては、身体サイボーグ化（機械化）あるいはエンハンスメント・老化遅延技術による生の延長がまさに実現しそうになってきている。人間はこれから若さを保ちながら、死ななくなるのではないだろうか。そうした場合、人間は果たして幸せになれるのだろうか、と疑問を発しているのが、アメリカ大統領生命倫理評議会の議長を務めたレオン・R・カスである。2003年、彼が中心となって、『治療を超えて(*Beyond Therapy*)』という報告書が出された。この報告書は「21世紀の米国の生命倫理界に衝撃を与えた重要文献」⁶⁾とされている。ただ、この報告書には誰がどの部分を執筆したのかは明らかにされていない。もちろん、レオン・R・カスが議長をやっているので、キリスト教保守派による影響が随所に見られる。また、報告書であると言う体裁からそれほど強い表現では書かれていない。例えば、生の延長と老化遅延について否定的な見解ではあるが、禁止せよとまでは言っていないのである。むしろ、2002年に出された『生命操作は人を幸せにするのか 蝕まれる人間の未来(*Life, Liberty and the Defense of Dignity: The Challenge for Bioethics*)』の方が、レオン・R・カスの本音（キリスト教に基づいた見解）が書かれているように思われる。特に、不老不死に関しては、「第九章 栄えある生命とその限界——生命に終わりがある理由」に彼の見解が描かれている。そこで、この章を取り上げて、不老不死（生の延長・老化遅延）は倫理的に問題があるのかどうか、人間を幸福にするのか、させないのか、カスの見解を見ていく。生の延長・老化遅延について、カスは次のように述べている。

「しかし、老化と死を克服すべしという昨今の命題はまた、批判とも無縁ではなかった。その内容は二つある。社会的結果に与える有害性と、公平な配分という意味での不満である。前者は人口数と年齢分布に与える影響を懸念するものだ。100歳を超える人間がどんどん増え、人口における割合が増していったら、たとえば、就職の機会、引退後のプラン、雇用と昇進、文化的態度や信念、家庭生活の構造、世代間の関係、政府の形態と機能の中心地、ビジネスと職業、などにはどう影響してくるのだろうか？ おおまかに考えてみても、「より長くより活動的な人生」を求めていくつもの解決方法を試した結果が、かなり破壊的で望ましくならぬものになることは想像にたやす

い。おそらく、多くの人々が一生のほとんどを経済的に困窮して過ごすことになり、いよいよ人生を終えるころには健康であることによって享受した利益も相殺されてしまっていることだろう。老化の阻止は明らかに「庶民の悲劇」の典型例になるだろう、と予測する人もいる。つまり、今まで純粹に個人単位で追求していたものが万人に与えられるという社会的結果によって意味をなさなくなる、あるいはもっと悪い結果をまねくこともありうるということだ⁽⁷⁾と。

もう一つの批判は次のものである。

「だがこれとは別に、長寿あるいは不死の命という技術の恩恵は、すべての人間に与えられるわけではないと指摘する批判もある。その理由の一つは、これは容易に想像できることだが、治療にかかる費用が高額なものになることだ。死とは無縁の命を得られるのはひとにぎりの人間だけとしたら、これほどの不公平があるだろうか？ただでさえ富める者と貧しい者に分けられている世界に、死ぬ人間と死なない人間という区別が加わるのだから」⁽⁸⁾と。

この二つがカスの生の延長・老化遅延についての批判と見ていいだろう。そして、人間は死すべき運命が決まっているからこそ価値があるというのである。つまり、人間は永遠に生きるのではなく、いつか死ぬと言うことがわかっているからこそ、人生は価値があるというのである。人間の有限性がわれわれに与える有益なものとは何であろうか。カスは四つ挙げている。一つは「興味と活動期間」であり、二つ目は「真摯さと情熱」であり、三つ目は「美と愛」で、最後に「徳と道徳的な気高さ」としている。これら四つの点が、人間に寿命があり、死が与えられているからこそ、人生にとっては有益なのだとする。

そして、最後にホメロスの言葉を引用している。ある意味、この引用はカスの心情を言い当てているのであろう。

「木の葉が代替わりするように、人間の代も変わっていく。木の葉は風に飛ばされ地に落ちる。だが木は生命をはぐくみ続け、再び春がめぐってくればまた若芽を出し、葉を茂らせる。人間も一つの代が終わっても、また次の代が育っていく」⁽⁹⁾と。

また、カスの主張が「死すべき運命」を受け入れて、次の世代に託すべきであることだが、それがキリスト教の立場からの発言であることも次のように述べているところからも察知できるだろう。

「実際、「生めよ、殖えよ」という戒律（聖書に登場する最初のはっきりとした神の命令である）は、正しく理解すれば、私たちが今ある生にしがみつくことを奨励しているのではなく、私たちの次にくる命を祝福するものであることがわかるはずだ」⁽¹⁰⁾と。

この点において、カスは聖書の引用を持ってきて、「神の最初の命令」とする。「生めよ、殖えよ」という戒律は、私たちの次にくる命を祝福する言葉ではあるが、「私たちが今ある生にしがみつくことを奨励しているのではなく」とある以上、私たちは死すべき運命を受け入れて、次の世代に託すべきだということになる。

最後に、カスは自分の気持ちを吐露しているように次のように言う。

「生命医学テクノロジーが次々と突きつける道德への挑戦に正面から向き合い、老化や死を克服できるという甘い言葉には疑念を抱こう。古来の知恵を守り、私たちの生に、私たちの次ぎにくる命に、孫やひ孫の命に、声をあげて乾杯しようではないか。神が望むまま、彼らが健康で長く生きるように。とりわけ、真理と正義と聖性を追い求めるように。そして彼らが、人間として最良のものを追求することを、延々と続くこれからの世代に伝え、永続化させていくように」⁽¹¹⁾と。

新しい生命医学テクノロジーは次々と道德に対して様々な問題を突きつけてくる。そのような生命医学テクノロジーの進歩は止められないし、否定できない。だからといって、このようなテクノロジーを推進させる「老化や死を克服できるという甘い言葉」に乗せられてはいけないのであって、むしろ、このような言葉に疑念を抱き、対決姿勢を示しているのである。この節の小題である「不老不死は人間を幸福にするのか」という問いに、カスなら「幸福にしない」と答えるだろう。

しかし、新しい生命医学テクノロジーがもたらすもの、例えば、生の延長であった

り、老化遅延であったり、それこそ不老不死が、何故いけないのだろうか。その根拠は何であるのか。カスのこれまでの主張から見れば、その根拠は「老化や死を克服できるという甘い言葉」が社会的結果に与える有害性と不公平な配分を招くというものである。しかし、果たしてこのことが十分な根拠となりうるのであろうか。このことも含めて、次の節で検討してみよう。

5. 不老不死は人間を幸福にしないのか——カスに対する反論

さて、不老不死は人間を幸福にしないのか。カスに言わせれば、「幸福にしない」ということになる。しかし、カスが生の延長や老化遅延に否定的であるのには、ある前提を置いているからではないだろうか。

まず、最初の批判から見てみよう。カスは「社会的結果に与える有害性」を挙げている。つまり、これは生の延長・老化遅延によって、もたらされた結果から社会構造が大きく変化し、特に社会の年齢構成がこれまでと異なり、年寄りがなかなか引退もせず、社会の中核にいて、若者がなかなか社会の中核に参加できなくなるということである。確かに、カスの主張するように、不老不死の未来の社会は悲観的に見えてしまうかもしれない。しかし、生の延長・老化遅延によって、もたらされた社会を考える時には、人間のライフサイクルというものを考えなくてはいけないだろう。現在の人間のライフサイクルで考えれば、明らかに有害性は出てくるだろう。では、生が延長した社会に適したライフサイクルを考えれば、どうであろうか。これはなかなか想像できないかもしれないが、過去の人間のライフサイクルと現在のライフサイクルを比較してみてもどうであろうか。寿命と生殖の間には何らかの関係があると言われている。例えば、現代の日本では、昔に比べて明らかに寿命が延びているが、それに応じて、結婚は晩婚化しており、それに応じて、女性の出産も遅くなっている。もちろん、単に寿命が延びたということだけではなく、女性の社会進出や長期にわたる教育など社会的要因があることは言うまでもないだろう。つまり、ライフサイクルは、その社会に応じたライフサイクルとなり、それほど心配することはないのではないだろうか。少なくとも平均寿命が延びたことによって、その恩恵を被っている人の方が多いのではないだろうか。

第二の批判は、「公平な配分という意味での不満」である。すなわち、「長寿あるいは不死の命という技術の恩恵は、すべての人間に与えられるわけではない」という批判である。しかし、これも現在においても国によって、人によって人生の長さは異なる。例えば、日本人の女性は、世界で一番長生きであり、平均寿命は86歳である。一方、ジンバブエでは36歳である。2倍以上の差がある。この格差は問題ではあるが、現実として受けとめなければならぬ。統計的に見れば、日本人の女性に生まれれば、世界で一番長生きができ、ジンバブエで生まれれば、その半分以下である。したがって、現在でも寿命はみんな異なっているのであって、そもそも寿命は公平だとは言えない。寿命に関しては、現在の人間ではどうしようもないのである。むしろ、不老不死の技術が開発されれば、現在では全くどうすることもできなかったジンバブエの人たちにもまた、その恩恵が与えられるかもしれないのである。そもそも、ここでの問題は「長寿あるいは不死の命という技術の恩恵は、すべての人間に与えられるわけではない」と言うものであった。しかし、希望的観測かもしれないが、これは最初の頃だけであり、技術が確立されてくれば、あつという間に広まる可能性もある。例えば、新しいテクノロジーの普及として携帯電話の普及が挙げられるだろう。携帯電話が出始めた時には、持っていた人はごくわずかであった。しかし、普及し始めると一気にその数は増えたのである。むしろ、普及している社会において、いまは携帯電話を持っていない人を捜す方が難しいだろう。そういう意味では、老化遅延技術が広まれば、すぐに広まり、「公平な配分という意味での不満」も生じないだろう。また、不平等である理由の一つに「治療にかかる費用が高額なものになる」ということを挙げている。しかし、これも普及していくことによって、費用も安くなっていくだろう。むしろ、どこの病院でも患者を獲得しようと値下げ競争に拍車がかかるのかもしれない。したがって、カスが心配するようなことは起こりにくいのではないだろうか。もちろん、まだ技術が確立していなかったり、過渡期の時には、カスの言うようなことも起こるかもしれない。費用が高額で限られた人しかその技術の恩恵を享受できないかもしれない。しかし、その時期を過ぎて、一気に広まるとすれば、そのような問題もなくなるのではないだろうか。

また、人間の有限性がもたらす有益なものとして、「興味と活動期間」、「真摯さと情熱」、「美と愛」、「徳と道徳的な気高さ」の四つを挙げていた。これらは人間に寿命があるからこそ価値として生じるとするが、何も人間の寿命が延びても、あるいは不死

になっても失われるものではないと思う。むしろ、個人の生き方の姿勢に関わる問題であり、たとえ、有限な生を持っていたとしても、その価値に気づかない人たちもいるであろう。したがって、カスが挙げている四つの点は、確かに生が有限な方がそのような価値を持つ傾向はあるかもしれないが、必然的に生じるものでもないし、無限の生を持ったからと言って失われるものではないだろう。むしろ、無限の生によって、多くの知識を身につけ、多くの美に触れ、感動を体験するかもしれない。したがって、一概には、生の延長や老化遅延が、このような価値を失わさせるというものではないだろう。以上がカスに対する批判である。

おわりに

さて、ここで、改めて人間の幸福について考えてみよう。そもそも、幸福とは極めて主観的なものであり、個人的なものである。例えば、好きな食べ物を食べていれば、その人は幸福を感じているだろう。しかし、食べ物の好みで言えば、人によっては嫌いな人もいる。嫌いな人にとっては、その食べ物は幸福どころか苦痛の対象でしかない。つまり、各人によってその好みや価値観は異なると言わざるを得ない。したがって、何を幸福と思うかは人それぞれということになる。一律に、これをすれば幸福であるということはいえないのである。生の延長もしくは老化遅延が可能になっても、やはり、人それぞれではないだろうか。生が延長することによって、幸福を感じる者もいれば、感じない者もいるだろう。本人の感じ次第だからである。幸福を感じる者は、自分の幸福追求権を行使しただけなのである。

ただし、多くの人が「長生きをしたい」とか「できれば永遠に生きたい」とか「もっとこの世で楽しみたい」と思うのも事実である。そして、自由主義の原則として、他人に危害を与えない限りは、その人の生き方はその人が決定できる、すなわち自己決定権があると考えれば、それをしてはいけないという権限は誰にも与えられていないのである。また、基本的人権にも幸福追求の権利が含まれており、誰でも等しく幸福になる権利を持っていることになる。したがって、現代の社会制度の下では、老化遅延技術が確立されたら、それを止める根拠は無いに等しい。できることは、「そのような技術は使うべきではない」と訴えることだけだろう。もちろん、人々がこの説得

を受け入れるかどうかはまた別の話である。この問題は、エンハンスメントにおいてもそうであり、本人が望むのであれば、周囲は止めることができないという意味では同じ問題を含んでいる。ちょうど、美容整形が本人の希望によって、望みどおり整形手術をするかのように、周囲は禁止させることはできないのと同様である。

つまり、われわれの社会が自由主義の社会であるかぎり、他人に迷惑をかけたり危害を与えないかぎり、個人の欲望を抑制させることはできないだろう。もし個人の欲望を抑制することになるなら、それはその人の幸福追求の権利を侵害することにもなる。

ここで、カス自身が述べていることを引用してみよう。

「私の希望をひとことでいえば、次のようになろう—私たちが人間の本质と人間の全体像を本当に理解できれば、人間にとっての繁栄と、人間にとっての善とは何なのかをもっと見極められるようになるだろう。気高い願望ではあろうが、絶対に実りが得られないわけではない。しかし、さまざまな困難があるのは明らかだ。とくに、人間が単純なものではないとわかったなら—すなわち、各人のもつ善性や究極の目的がただ一つしかないのではないとわかったなら（そして人間とは明らかにそういうものであるらしい）」⁽¹²⁾と。

このカスの言葉に従えば、技術的に不老不死が実現されるとして不老不死を幸福と見なすかどうかは、当の本人の問題ということになる。不老不死に期待を持ち、幸福であると見なす人にとっては、これまで寿命によって不可能であったことが可能となるであろう。そうすれば、その人にとっては、不老不死は幸福をもたらしてくれるものとなる。逆に、不老不死が不幸であると考える人なら、死は永遠の眠りとして幸福をもたらしてくれるだろう⁽¹³⁾。

注

- (1) 鎌田東二 「クローンと不老不死」 町田宗鳳 島齒進編『人間改造論』所収 新曜社 2007年 73頁。
- (2) 同上 74頁。
- (3) 同上 74頁。
- (4) 高木美也子 「ES 細胞研究と倫理的諸問題」 『小児外科』 Vol.40 No.10 所収 2008-10 1116-1120 頁。

- (5) http://www.yomiuri.co.jp/Iryou/news/Iryou_news/20081018-OYT8T00220.htm
- (6) 森岡正博「生延長(life extension)の哲学と生命倫理学：主要文献の論点整理および検討」『人間科学：大阪府立大学紀要』2所収、2007年3月、71頁。
- (7) Leon R. Kass, *Life, Liberty and the Defense of Dignity : The Challenge for Bioethics*, Encounter Books, 2002, p.261. (レオン・R・カス 『生命操作は人を幸せにするのか 蝕まれる人間の未来』 日本教文社 2005年 354頁。)
- (8) *ibid.* pp.261-262. (同上 354-355頁。)
- (9) *ibid.* p.273. (同上 372頁 ホメロス『イーリアス』第六歌。)
- (10) *ibid.* p.274. (同上 373頁。)
- (11) *ibid.* p.274. (同上 373頁。)
- (12) *ibid.* p.297. (同上 404頁。)
- (13) 本稿は、中部生命倫理研究会(2008年2月9日 名古屋大学)にて、発表したものを大幅に加筆・訂正したものである。コメントを頂いた諸先生方に、この場を借りて感謝を申し上げます。